

おわりに

基町相生通りの最初の調査(1970年)、再開発による移転完了後に行った追跡調査(1979年)からすでに半世紀の歳月が過ぎた。

調査した私たちも年を重ねた。相生のまちが再開発で消えてから40年が過ぎた。戦後の広島の河岸に30年にもわたって存在し、時には原爆スラムと呼ばれた相生のまちは、思えば当時の広島を象徴する空間であった。被爆・国籍問題、貧困・衛生・健康や差別の問題など、様々な問題を抱えながらも、たくましく優しく人々の気配あふれる暮らしの空間であった。

一度は断念しかけた出版を、再び起動できたのは広島市公文書館からの申し出のおかげであった。幸いにも保管され見つかった当時の我々の調査資料を、広島市公文書館に寄贈(2015年)できたことと合わせて、この間書き留めていた文章に今日の視点から新しく書き加えたものを、ここで一つにまとめておくことは、広島戦後史の大切な一面を確かめる貴重な資料となることと確信している。このささやかな作業が、ヒロシマの廃墟の中から立ち上がった人々の生きた証となり、願いとも呼応して、これからの広島とヒロシマの何かのお役に立てればと願うものである。

2019年に、「はじめに」に一文を加えてから1年たった2020年は、思ってもいなかった年となった。コロナ禍のなかでの制約された環境にあって、遅々として進まない編集作業ながらも、あきらめず連絡を取り合いながらの時間であった。そうした中で昨年末、幸いにも出版を引き受けてもらえる出版社と出会えることができた。

この3月、桜が咲き始める前の晴れた一日、かつての相生通りを相生橋から三篠橋まで歩いた。星形の県営アパートは姿を消し、サッカー場建設に向けての準備か、基町高層・中層アパート南の緑地帯の一部は、工事用の塀で囲まれていた。土手みちは支障なく歩くことができ、コロナ禍のなかでも河岸にはわずかの人たちだが、春の日差しを楽しんでいた。これが今の「基町相生通り」の風景だが、変貌の兆しがそこそこに見られたのである。

さて、アメリカ大統領選挙、混乱はありながらも、この4年間と違った連携の構造への道が示されつつある。新たな緊張も芽生え始めているが、地球温暖化に対するパリ協定も徐々にではあっても動き始めるのではないか。そして何よりもこれからの礎となるのが、今年2021年の1月22日、50か国の批准を受けて発効した核兵器禁止条約である。核廃絶を目指す広島にとって、これは大切な条約である。広島・基町相生通りを一冊の本としてまとめる意味・願いも、回り巡ってそこにある。これから姿を変えていくであろう基町と、かつての相生通りを注視しながら、そのことを忘れないようにしたい。

最後に、私たちの出版の申し出を引き受けていただいたあけび書房の岡林信一氏に感謝するとともに、著作権整理にあたって貴重なアドバイスをいただいた広島市公文書館や、調査以来お世話になった多くの方たちへのお礼をここで申し上げて、筆をおきたい。

2021年4月 筆者一同